郷土への扉
The gateway to local history

島津義久と霧島市

今年は戦国武将・島津義弘の没後四百年です。霧島市は、義弘の兄・義久と大きなつながりがあります。今回は、その島津義久について紹介します。

九州統一への戦い

義久は天文二（一五三三）年に島津家第十五代当主・貴久の嫡男（長男）として伊作城（日置市）で生まれました。四人兄弟で、次男が義弘、三男が歳久、四男が家久です。

初陣は、天文二十三（一五五四）年の岩剣城（姶良市）の戦いです。ここから親・兄弟と共に戦いに明け暮れ、永禄九（一五六六）年に島津家第十六代当主となり、薩摩国（薩摩半島）を統一しました。日向国（宮崎県）の伊東氏や大隅国（大隅半島）の禰寝氏、肝付氏、伊地知氏らを次々と服従させた義久は天正二（一五七四）年、大隅国を統一しました。

そのような中、豊後国（大分県）の戦国大名・大友氏が義久の北上に対抗するため日向国に攻め込んできました。義久は劣勢をはねのけ、耳川の戦い（宮崎県木城町）で勝利し、九州南部での支配を確固たるものにしました。

さらに支配を広げた義久。ついには大友氏の本拠地まで迫ります。窮地に陥った大友氏は豊臣秀吉に助けを求めました。当時、九州のほとんどを手中に収めていた義久は豊臣氏に反発し、天正十五（一五八七）年に秀吉と戦いますが、泰平寺（薩摩川内市）で降伏しました。その後、秀吉が薩摩国を義久に、大隅国を義弘に※1安堵しました。しかし、文禄三（一五九四）年から翌年にかけて実施された※2太閤検地で、義久が大隅国や日向国を、義弘が薩摩国の主要な土地を統治することに。そのため、秀吉は実質的に義久を島津氏の代表として扱うようになりました。

義久は大隅国の浜之市（隼人町住吉）に富隈城を築いて居城とし、浜之市港や城下を整備しました。一方、島津氏の代表として扱われるようになった義弘は、義久に遠慮して鹿児島には入らず、帖佐（姶良市）の館を拠点とし、後継者とされた忠恒（義弘の三男）が鹿児島に入りました。

義久が居城した富隈城跡

義久の功績

秀吉の死後、慶長五（一六〇〇）年に関ヶ原の戦いが起こりました。徳川家康の敵である西軍に付き、負けた島津氏は、義久が先頭に立って戦後交渉を行いました。義久は家康からの再三の呼び出しに最後まで応じず、富隈城にいたまま二年をかけて粘り強く交渉した結果、土地を取られることなく、明治維新まで領地が引き継がれました。これは義久の功績といえるでしょう。

慶長九（一六〇四）年には、国分新城（舞鶴城・国分中央）を築いて移住し、街の整備などを行い、慶長十六（一六一一）年に亡くなりました。弟・義弘の人気の影に隠れている義久ですが、島津氏安泰の礎を築いた政治家として歴史家から高い評価を受けています。『名将言行録』に義久の人となりが分かる逸話が書かれているので、最後にその一つを紹介します。

国分新城の城門は茅葺きでしたが、破損したため、家臣の山田有信や伊集院久治が「この際、小板葺きにして、見栄え良くしてはどうですか」と言ったところ、義久は「他国から来る使者は必ず道理をわきまえた人だろうから、薩摩・大隅・日向三カ国を治める国主の城門が粗末でも、人々の生活の様子が栄えていれば、政治が良くできていると思うだろう。しかし、見栄えの良い城門でも、人々が苦しんでいては政治が良くないと見抜かれるだろう。大切なことに気を配らずに、どうでもいいことを気にするものではない。元の茅葺きで構わない」と言ったそうです。

（文責＝坂元）

※1　土地の所有権などを権力者が承認すること。
※2　租税賦課の基礎条件を明確にするために豊臣秀吉が行った土地調査。